『狭衣物語』の位置
――物語史における狭衣大将――

安達敬子

(一)

『狭衣物語』が古来『源氏物語』と併称された傑作であり、冒頭表現の様式・場面・和歌など多岐にわたってそれ以後の物語に絶大な影響を与えたことは贅言を要しない。しかし、登場人物については、飛鳥井姫君に比較して、狭衣大将の人物像は、宇治十帖の薫型と片づけられがちで、独自の影響力を及ぼしたとはあまり考えられていないようである。

そうしたなかで、現存作品中、狭衣大将そのものに着目した例外的な物語として『有明の別れ』をとりあげてみたい。『狭衣物語』と『有明の別れ』の影響関係は、構想や表現の一部が断片的に指摘されてきてはいるが、[1] ここでは、『有明の別れ』の主人公、男装の女大将の造型における狭衣大将の影響が、従来考えられていたよりもはるかに強いものであることを検証してみる。

『有明の別れ』の女大将は、男装という特異な趣向とその正体を見破られた末、入内して国母となり栄華をきわめるといった筋の進展から、『とりかへばや』の女中納言との関連が専ら重視されてきた。ところが、女大将には、「男装の麗人」という設定の他に、もう一つ、類稀れなる超越的資質という重要な性格が与えられている。そして、この超人的ともいうべき資質と、家族の人物設定をめぐって、『とりかへばや』の女中納言よりも狭衣大将の方と甚だ類似する記述が存在しているのである。(以下、上段に『有明の別れ』、下段に『狭衣物語』の本文を掲げる)[2]

(1)左大臣の、宮ばらに、朝夕御まへさらずいつききこえたまふ御おぼえ、かたち、身の才をはじめ、帝のまちおぼしめしたる御けしき、世の人のめできこゆるさま、いみじからん御心おごりも、げにつみあるまじかめるを、

(堀河関白八)かゝる御中にも、斎宮をば、親様に、あづかり聞こえ給にしかば、やんごとなくかたじけなき方には、心ばへよりはじめて勝れ給へるにしも、かく世に有難き此世のものとも見え給はぬおとこ君さへたゞ一人ものし給へ

いかなるべき御心にか、あさましきまでもてしづめて、さらにみだれたる御心なきをぞ、あやしきまで思ひなやむべき

（巻一・40頁）

権門に生まれ、皇女を母に持ち、容貌、才能あらゆる面で当代随一の貴公子でありながら、落ちついた性情も兼ね備える点で彼らは共通する。しかし、まだこれは、後期物語の主人公の性格としてはさほど特殊なものではない。けれども、次例以下の類似点は、ただ『有明の別れ』の女大将と狭衣大将にのみ見出されるのである。

(2)神の御しるべや、げにいみじかりけん、そぞろに身をかくすことなんおはする。かくれみのなどいひけんやうに、いたらぬさとなくまぎれありきたまふままに、世にゆかしきところなく、みぬ人のかたちおはせぬも、げに鏡のかげにたぐふばかりの御身ながらも、えぞみいでたまはるを、…（中略）…親たちの心ざしには、いひ知らずあるまじき事をしいで給ふとも、この御心には少し苦しく思されんことは、露ばかりにても違へ聞え給べくもなけれど、世の男のやうに、をしなべて、乱りがはしくあは〳〵しき御心ばへぞ、なかりける。（巻一・32～33頁）

をのづから心にくきあたり〳〵を、「いかにせん〳〵」とのみ、物嘆かしくなり給て、かやうの「よそかの中宮の亮の隠れ蓑」もうらやましうなり給て、人知れず、ひとわたりづゝ案内し給はぬわたりは無きにや、少しうちなずらひに思さるゝも無きに、

（巻一・36頁）

ぬ。（巻一・46頁）

散逸物語『隠れ蓑』を彷彿させる、美女を求めてのいたらぬ隈なき垣間見歩きと容易にそれが見つからぬ点。（女大将の場合は「隠身の術」という超能力になっている）

(3)（右大臣家の女房達の噂）

妹の姫君、ただおなじさまにて、帳のうちにぞいつかれたまふなる、あまりみぐるしき御もてなしとてこそ世人はそしりきこゆなれ。内まゐりも、いかなればいつをかぎりともなくのびゆくならん。それもやただひとりすぐしたまはんとすらん。さては貴宮のたぐひならん。

（巻一・70頁）

（狭衣大将と源氏宮は）

たゞ双葉より、露の隔てなくて、生ひ立ち給へるに、親達を始めたてまつりて、よそ人も、御門、春宮なども、一つ妹背と思し掟て給へるに（巻一・30頁）

（春宮の言葉）

世とともに、物嘆かしげなる気色こそ、心得られね。何事のさはあるべき。いみじからんかぐや姫なりとも、そこの思はんことは避るべきやうなし。仲澄の侍従の真似するなめり。人もさぞ言ふなる。おとゞもかゝればつれなきなめり（巻一・64頁）

『有明の別れ』には女大将の妹という仮空の姫君がいる。『とりかへばや』の男尚侍の影響も無視しがたいが、第三者によって、主人公との仲が『宇津保物語』の「仲澄・あて宮」にたとえられており、しかも、次に掲げる事例、父が「右大臣の姫」に遠慮し入内にふみきらな

いことや、それに対する帝（又は春宮）側の不満が共通することなどを考慮すると、女大将と妹姫という世間向けの設定は、「一つ妹背」と思われている狭衣大将と従妹源氏宮との関係により多く負うているのではないだろうか。[3]

(4)（帝は）色なる御心地にはそぞろになつかしくて、いとど姫君の御まゐりをせめのたまはすれど、大臣いみじくつれなくのみもてなしたまひて、いまの右大臣の御むすめぞ、かんのとのとて、はじめよりまゐりたまへるを、いとほしとてかたさりきこえたまふさまにもてなしきこえたまふを、あまりの御用意と心もとなくおぼしめしわたるべし。

（巻一・42頁）

かの右の大い殿の、「姫君こそ参らせたてまつらん」と、御気色とり給ひしかど、「なを、『源氏の宮参らせ給ひて後にぞ』とのみ、思し召す」と聞き給て、いと心もとなく嘆き給ふ。大殿聞かせ給て、「この御事は、いつも〳〵異様に思ふ給へ侍らねば、今少し大人び給ふを待ち侍程は、かの右の大ゐ殿の、まづ参らせて御覧ぜよ」など、たび〳〵啓し給て、いとたい〳〵しげに思したるを、春宮、いと恨めしげに思しけれど

（巻二・122頁）

また、女大将と狭衣大将には、各々の両親達が我が子の異常なまでの美質に対する強い危惧を抱いている。

(5)みるめのめでたさはさらにもいはず、のたまひいづる言の葉、よろづ珍しくめでたき御有様なり。かくのみ世の中に言ひ賞で琴・笛の音まで、あめつちおどろかすといふ、はかりなき御さまなり。帝もゆゆしくのみおぼしいたつきたるを、まして殿の御心は、つきせず御むねのみつぶしつつ、やすき寝をだにもねたまはず、いかにとのみ、しづ心なくおぼしたるぞあはれなる。

（巻一・40〜42頁）

『とりかへばや』の女中納言の父にも、一見似た悩みが記されているが、これはあくまで本来姫君であるはずの娘が男として、容姿、才芸をもてはやされていることへの悩みであり、女大将・狭衣大将についての「ゆゆし」に基く懸念とは質を異にするものであろう。

この両親の不安は、二つの物語いずれも物語開始後ほどなく語られる宮中での奇瑞において最高潮に達するが、その前後の、母宮の描写が一致するのは注目してよい。

(6)（奇瑞の後）宮はいとどしづ心なく、ただなにごともすぐれたまはず、人におとりても、ながくみえたまはんことをこそうれしくおぼす御心なれば、「またいかなることいでこむ」と、胸をのみつぶしたまへり。いつしられ給を、大殿・母宮などは、いと余りゆゝしく、危きものに、思ひ聞えさせ給へり。

（巻一・36頁）

（参内しようとする狭衣大将は）この世の色とも見えずなまめかしくて、さし歩み給へる御指貫の裾まで、あてになまめかしくおはするを、[母宮]「などかく、生ひ成るらん。たゞ世に見ゆる人々のやうにて、おはせしかば、

かひきつづきいでたまふにぞ、いでむかふといふばかりにおぼしさわぐ。かたじけなく、はづかしきかたも世のつねの大将におはせねば、ものなどまゐりすゑたまひて、ただみづからぞきこえそそのかしたまへど、例のあやにくに、みもいれたまはぬを、いましもめづらしきことのやうにおぼしなげく。

（巻一・116頁）

心安からましものを」とて、涙を一目浮けさせ給て、せちに見送らせ給ふけしきを

（巻一・42頁）

（奇瑞の後）はゝ宮の、見たてまつらせ給はん御気色、思ひやるべし。「いかに苦しくおぼし給ぬらん」とて、自らとかく賄はせ給ひて、物参り給へど、まことに苦しう悩ましく思されて

（狭衣）「今宵は不用に侍り……

（巻一・51頁）

むしろ我が子が凡庸であることを望み、宮中から退出してきた際には、女房まかせではなく自ら給仕しようとする母宮の心情は特徴的である。

そもそも、この二つの物語は、共に楽の音による三度の奇瑞（そのうちの一つは天人降下）を有すること自体重要であるが、今問題にしている(6)の奇瑞では特に帝が共にためらう主人公に笛を強制したことが発端になっている。

(7)横笛たまはせて、（帝が）のがるべくあらずせめのたまはするを、はてはては御けしきさへまことにうらめしげに、ことの興なきさまにおぼされたる、わりなれば、

（狭衣の言葉）「いとあぢきなき所望をもし給かな。かやうのことは、をのづから隠れ候はず。此方には堪えずや侍るらん。すべて大殿など、すこしも教うること侍らず。まして笛は、いかに思はるゝにや、戯れにても吹き鳴らす物とも、知らずなん」

「もとよりならひつかうまつることも侍らざりしを、この春いささかまねび侍りしに、あやしく雲のけしきかはりて、空にとがめあるよしみえ侍りしのち、大臣もさらにかやうの道まねびつかうまつるまじきよし、あながちにいさめ侍るによりて、このおほせごとをえこそたまはるまじき」よし、つれなく奏したまひて、手ふれたまはぬに、おぼしめしわびて

（巻一・110～112頁）

とてむげにあるまじき由を奏し給へば……

（帝の言葉）「いはけなかりつるより、大殿のけしきにも劣らずこそ、思ひつれ。かばかりの事をだに言ふことをきかねば「まいて」と、よろづ推し量られぬ。よし〳〵言はじ」とて、まめだち給へば

（巻一・43頁）

このように、『有明の別れ』中、二度目の奇瑞、宮中梅花の宴に於ける奇瑞は、『狭衣物語』の最初の奇瑞、天稚御子降下事件に多く依拠している。後に女大将が入内して立后後、宮中で催された花の宴での遊びの際にかつての梅花の宴を偲んで「あまくだる天人もなければ」（巻一・212頁）とあるのも、梅花の宴の奇瑞が『狭衣物語』の天稚御子降下をふまえていることを示唆するのではないだろうか。『とりかへばや』には奇瑞という要素は見出だせず、この点で『有明の別れ』や『狭衣物語』との距離は大きい。

しかも、前述のような明らかな類似以外にも、『有明の別れ』は

『狭衣物語』の記述に誇張や注釈などの操作を加えて、自らにとりこんだと思われるふしがある。

(8)あまりかなしきものにおぼしければ、むまれたまへりといふきこえをだにつつみて、十ばかりになりたまふまで、人にしらせたまはざりしを、あまりの御心どもとて、人にありしかど、みたてまつる御ひかりは、げにことわりにあはれにぞ思ふべかめる。

（巻一・106頁）

女大将への度をこした両親の溺愛と不安は、『狭衣物語』の次の引用部分をより強調したものではないか。

(8)′母宮などは、「天人などの、はじめて天降り給たるにや」と、いと恐しく、かりそめにのみ思ひ聞えさせ給て、御まじらひなども、後めたう思ひ聞えさせ給へど、「さのみはいかゞ」とて、まじらひ給にも、目をつけ、心をそへたてまつり給さまなど、御心の暇なげなり。雨風の荒きにも、月の光のさやかなるにも、あたり給をば、いま〳〵しくゆゝしうぞ、思ひ聞えさせ給へる。

（巻一・33頁）

また、女大将の出生は「神の申し子」という神秘的な色彩を帯びていた。家を継ぐ男子のいない左大臣が神仏に祈った結果授かった一人子であった。

(9)大臣の、おとなびたまふまで、男君むまれたまはで、つぎおはすまじき世を、かしこき道にもかんがへたてまつりけるを、いみじくおぼしなげきしあまり、さまざまの御いのりをしたまひしに、この君ばかりがみごもりたまひて、神の御しるべしめしつげたまふやうありければ

（巻一・44頁）

一方、狭衣大将の出生には、特に何も述べられていないものの、彼の両親の年齢差は注意されねばならない。引用(1)にあるように、父堀河関白は母前斎宮（先帝の妹）を「親様にあづかり聞え給」とあり、ここでは当然、光源氏と女三宮の関係を想起すべきであろう。さらに、堀河関白の弟である嵯峨院の女一の宮が狭衣大将より八歳程年長であること（巻三）、彼が、異母姉中宮の子である春宮（つまり彼の甥）と式部卿宮の姫君を争っていること（巻四）を考慮すると、少なくとも狭衣大将は、父堀河関白が壮年期以後にようやく授かった、ただ一人の男子であることは明らかである。こうした状況の背後に「神仏の申し子」の可能性を『有明の別れ』が想定しても、物語の伝統からして、また当時の読者にとっても決して不自然なことではないだろう。(4)

さて、『有明の別れ』の女大将は、神の申し子にして隠身の術や奇瑞をもたらす楽才などの超能力を身に備えた常ならぬ人であったが、物語も終結に近い院の四十賀における三度目の奇瑞、天人降下事件でようやく前世では天人という出自が明らかにされる。ここで今までの彼女の超人性の謎が解けるのであるが、実はこの超人性はすべて入内前の男装時代に集中していて、女性の姿にもどってからは、この院の四十賀まで、すっかり影をひそめている。そして、件の天人降下も、そのきっかけをひらいたのは、女大将の再来ともいうべき第二子、春宮の笛の音であった。女大将が前世において男性の天人であったという説も提出されているが、(5)それに従えば男装こそが女大将の本来の姿

であり、神異がその時期に集中しているのもうなずけることである。

ともあれ、女大将という「変化の人」の超越的特質のほとんどが狭衣大将を源泉として成ったのは、以上みてきたところである。つまり『有明の別れ』は狭衣大将の中に超越的神人の典型を見出し、そうした狭衣大将理解に依拠して、天人の化身たる女大将を創造したのであった。この意味で、『有明の別れ』の女大将は、『狭衣物語』の影響史のなかで、従来より重視されてしかるべきであろう。

(二)

それでは、実際に、『狭衣物語』中、狭衣大将に賦与された特性自体はいかなるものであろうか。『有明の別れ』の狭衣大将の理解は恣意的で特殊なものなのであろうか。

前章の引用(2)、女大将の「隠身の術」について、中村忠行氏は早く『狭衣物語』を通した、散逸『隠れ蓑』の間接受容によるものと指摘されたが、[6]『狭衣物語』の『隠れ蓑』引用は、上記(2)だけにはとどまらない。

(a)（狭衣が源氏宮の前で琵琶をひく）「萩が花摺り」と謡ひつゝ、少し心に入れて弾き給へる音は、言ひ知らずおもしろくあはれなるに、掻き返さるゝ撥の音、愛敬づきめでたくて、雲の上に響きのぼるを…（中略）…余りならば、昇る心地するを、「隠れ蓑の中納言の真似にや」と、撥つい挿し給つ。（巻二・192頁）

(b)（女二の宮との最初の密通をさして）など、過ぎにしかたの、隠れ蓑を見あらはす人のなかりしぞ。（巻三・293頁）

(c)（狭衣が式部卿宮の姫君のもとへ忍んだとき女房が）「人も久しうおはしまさぬこの御方にしも、おぼえなき匂ひこそすれ。あなむつかし。紙燭やさゝまし。いと暗し」とて、たち帰りたれば、若き人々は、いみじう怖ぢ騒ぐを…（中略）…「隠れ蓑の中納言にやおはすらん」など、口々戯れに言ひなせど、君は（姫君）、更に物恐ろしうて、顔ながら、ひきかづきて臥し給へり。乳母、紙燭さしてくれば、帳の中に、（狭衣は）やをら入り給ぬれど、知る人もなし。（巻四・399頁）

『狭衣物語』に先行物語名の引用は数多いが、その多くは「たゞかくて『伏籠の少将』のやうにてやあらまし」（巻二・171頁）「もし唐国の中納言のやうに、子持ち聖や設けんずらん」（巻二・196頁）など、先行物語中の登場人物の行動や状況に自らのそれを比較する類のものである。(a)はその例の一つであるが、(c)では、狭衣大将をさして女房達が「隠れ蓑の中納言」その人かと疑っており、(b)は密通という人目を忍ぶ行為そのものを「隠れ蓑」と称していて、狭衣大将に『隠れ蓑』の主人公の行為を重ね合わせようとする意図がくみとれはしないだろうか。しかも、次に掲げる引用部分は、(2)における狭衣大将の微行の一例であるが、その記述によれば、なおさら隠れ蓑を身につけた者の能力がそのまま狭衣大将にもたらされているかのごとき印象を強く与えられるのである。

○「右の大臣の秘せらるゝ女、此御かたちにこそ並ばざらめ、孫王立ちて、そば〳〵しう、鼻高にきら〳〵しきかたちにやあらん」とぞ推し量からるゝ。帳の内よりも、さし出でず、母・乳母より

外には、あたりに人も寄せず、際もなくこそかしづくなれど、自ら悔ゆる宮腹の独り女のやうにやあらん」とて、笑ひ給へば、

「かの、思かけざりし、宵の火影は、さしも白玉の瑕までは見えざりしかど、鼻高は、いとよく言う当て給へり」と思出るに、少しほゝ笑まれ給ぬるを　（堀河関白）（狭衣は）　（巻一・59頁）

母と乳母以外は側にも寄せつけない右大臣秘蔵の姫君の細やかな容貌も狭衣はよく垣間見て知っている。また、(b)の女二の宮との密通も、最初の密通発覚後、皇太后宮の厳重な警戒下にあるはずなのに、彼は何度も女二の宮に忍んでいる。それは「たゞありしやうにて、浅ましうわりなき夢路にまどひ給折々」（巻二・142頁）と、やはり最初の逢瀬の「隠れ蓑」がほのめかされているのである。

狭衣大将の中に、隠れ蓑的能力の胚子は存在し、それが朧げに暗示するにとどめたものを、『有明の別れ』は「隠身の術」と明確化したにすぎない。もともと、「隠身の術」は、神仏や鬼・木魂など超自然的存在の力として特徴的なものであった。作り物語では、『竹取物語』のかぐや姫に与えられているのが最初である。

御門、「などかさあらん。猶ゐておはしまさん」とて、御輿を寄せ給ふに、このかぐや姫、きと影になりぬ。はかなく、くちおしと思して、げにたゞ人にあらざりけりとおぼして[7]　（57頁）

散逸『隠れ蓑』も『風葉和歌集』所載の詞書からは、隠れ蓑を着用した主人公が神仏の代行機能を果たしていることがうかがえるのである。[8]『有明の別れ』とほぼ同時代に成立した『松浦宮物語』では、天衆の化身たる唐后が弁少将との逢瀬にやはり「隠身の術」を用いている。

たを〳〵となよびなる物から、たゞいさゝかおもひあふる程もなく、かいけつやうにきえうせぬれば、さらにいはむかたもなし。かくれみのゝためしにやとまでさぐれど、あとかたもしられず。[9]　（巻二・200頁）

変化の者にとって隠身の超能力は身に備わるものであったらしいが、狭衣大将にさりげなくほのめかされた『隠れ蓑』の陰影は、このような文脈でよみとられるべきであろう。

次いで、音楽の才は、作り物語の主人公、特に後期物語においてはきわめて一般的な美質である。しかし、「天地おどろかす」が文飾ではなく、文字通り天地の奇瑞を招来するほどのものはさほど多くはない。そうした楽才を扱った先駆にして代表的作品『宇津保物語』は、その音楽伝授の起源が天上界にあることを、首巻俊蔭巻に語っている。奇瑞はないものの『夜の寝覚』の中君は夢中に天女から琵琶を伝授された。

狭衣大将と女大将は、前章引用(7)で、共に、特に音楽の伝授にはかかわっていないことを帝に言明しているが、女大将については、その楽才は、前世の素姓と関係しているらしい。その間の事情を明瞭に説明してくれるのが、やはり『松浦宮物語』である。

しかあれども、ふかくこの琴の心をしれる事、いまの世にとりては、華陽公主ときこゆる女みこにはおよびたてまつらず…（中略）…女の身なれど、前の世に琴をならひて、しばしこの世にやどり給へるゆへに、をのづからさとりありて、そのてを仙人につ

たへ給へり　（巻一・165頁）

華陽公主も、実は前世は蓬来宮の仙女であったことが唐后の口からあきらかにされる。[10] 女大将も華陽公主同様、前世の、天上界での楽才が、人間界でも誰の伝授にもよらずそのまま保たれていたのであろう。

狭衣大将の場合も、父堀河関白が嵯峨帝に奏上した言葉、

まして、「此琴・笛の方は、戯れにもまねぶらん」とこそ、思ひ給へ寄り侍らざりつれ。いかにして、かく世の例になるばかりの音を伝へ侍けるにか、いと珍らかにも思ひ給へらるゝかな。たゞ、「かれ、神のさとしにや」と思ひ給へらるゝ。

（巻一・49～50頁）

の中にある「神のさとし」という言葉は、彼の天上性について前述の内容を示唆する十分なキーワードの役割を当時の読者にはたしたのではないかと考えることができる。

そして、何より、こうした楽才がもたらした最初にして最大の奇瑞、天稚御子降下そのものが最も雄弁に狭衣大将の本性を物語る意義を本来的に有していたのであった。笛の音を愛で、狭衣大将を天上にいざなう天稚御子降下は、『竹取物語』のかぐや姫昇天と、『宇津保物語』吹上・下巻、神泉苑の奇瑞の二つを典拠にするといわれている。かぐや姫昇天の意味はいうまでもないが、より直接的な影響の強い『宇津保物語』でも、単に仲忠の卓越した琴の伎倆を示すだけにはとどまらない。ここに至るまでには、俊陰巻以来のさまざまな予言・遺言が積み重ねられており、神泉苑での奇瑞はその実現であった。煩をいとわず、以下引用する。（傍線は私に付した。以下同じ）

(ア)（阿修羅の言）天女音声楽をして植ゑし木なり。さてすなはち天女宣はく…（中略）…其の時に倒して三分に分かちて、上の品は三宝より始め奉りて忉利天までに及さむ。中の品は前の親に報い、下の品をば行末の子どもに報いむ』と宣ひし木なり。

（俊蔭巻・16頁）

(イ)（天人の予言）我その昔いささかなる犯し有りて、ここより西、仏の御国よりは東なる所に下りて、七年ありて、そこに我が子七人留まりにき。其の人は極楽浄土の楽に琴を弾き合はせて遊ぶ人なり。そこに渡りて、其の人の手を弾き取りて、日本国へは帰り給へ。この三十の琴の中に、琴まさりたるをば、我名づく、一つをばなん風と付く。二つをばはし風と付く。…（中略）…この二つの琴の音せむ所には、娑婆世界なりとも必ずとぶらはむ。

（同・18頁）

(ウ)（仏の予言）又、この山の七人にあたる人を三代の孫に得べし。その孫、人の腹に宿るまじき者なれど、此の日の本の国に契結べる因縁有るによりて、其の果報豊かなるべし。　（同・22頁）

(エ)（俊蔭の遺言）此の屋の乾の隅のかたに、深く一丈ばかり掘れる穴あり、その上下ほとりには沈を積みて、此の弾く琴の同じさまなる琴、錦の袋に入れたる一つと、褐の袋に入れたる一つ、錦のはなむ風、褐のをばはし風といふ。…（中略）…もしは子あらば、其の子十歳のうちに見給はむに、さとくかしこく魂ととのほり、容面・心人にすぐれたらば、それにあづけ給へ　（同・28頁）

(オ)かかる程に、涼・仲忠が琴の音ひとし。右大将のぬし持たせ給へるなむ風を、みかどに、「これなむ仲忠が見給へぬ琴に侍なり。つかうまつらせむ」と奏し給ふ。たまはりて何心なくかきならすに、天地ゆすりて響く。帝より始め奉りて大いに驚き給ふ。仲忠「今は限り、この琴まさにつかうまつりしづまりなむや。ねたくくちをしきに、同じくは天地驚くばかりつかうまつらむ」と思ひぬ…（中略）…仲忠七人の人の調べたる大曲遺さず弾く、涼弥行が大曲の音の出づる限りつかうまつる。時に天人くだりて舞ふ。仲忠琴に合わせて弾く、

朝ぼらけほのかに見れば飽かぬかな
中なる乙女しばしとめなむ[11]　（吹上の下巻・327頁）

順番に予言・遺言をたどっていくと、最後の(オ)、天人降下は、仲忠、涼両人の才能をたたえるためのみでは決してない。世人にはそう見えたにしても、これは名琴「なむ風」が(ア)に言う天女の行末の子である正当な所有者の手に伝わったこと、換言すれば、仲忠がまさしく天女の子である七人の仙人の化身に他ならないことの証明であった。俊蔭女が「なむ風」「はし風」を弾いても、天地の奇瑞だけで天人降下は伴わないことも側面からこれを裏付ける。『宇津保物語』において、人間界に天人が降下してくる奇瑞は主人公の本性を説きあかす意味をもつ。『有明の別れ』では、天女が女大将（巻三では女院）の正体を明かす和歌をよむが、『宇津保』にはじまる物語の文法からすれば、ダメ押しにすぎない。そして、このことは『狭衣物語』天稚御子降下についても有効であろう。天稚御子は狭衣大将の美貌や楽才を人間界に過ぎたものとして惜しむだけであるが、帝の思考をかりて「世の人の言種に、天人の天降り給へると言ひ聞えたる、今宵ぞまことなりけり」（47頁）と事件の意味を解説させている。が、このような説明なしでも天稚御子降下は狭衣大将の本性を示すのに、必要にして十分であることを『狭衣物語』の依拠した『宇津保物語』が教えてくれるのである。

狭衣大将の美貌に対する両親の感慨も、ごくありふれた表現ではあるがもとをたどれば、『竹取物語』の翁の心情にたどりつく。

『狭衣物語』
はづかしうなつかしき御有様などは、うち見たてまつるより、身の憂へも忘れ、思ふことなき心地して、うち笑まれ、命延ぶる心地ぞし給ひける。　（巻一・35頁）

『竹取物語』
この児のかたちけうらなる事世になく、屋のうちは暗き所なく光り満ちたり。翁心地あしく、苦しき時も、この子を見れば、苦しき事もやみぬ、腹立たしきことも慰みにけり。　（29～30頁）

冒頭近くに紹介される、狭衣大将の容姿はかぐや姫の後継者の系譜に位置づけされ、前掲引用(5)・(6)・(8)′に述べられた両親の異様なまでの不安も、かぐや姫昇天における翁の悲嘆を前提にしてこそ、実感を伴って解されるのである。

伝奇的な要素の多さが『狭衣物語』の際立った特徴であるにしても、狭衣大将に賦与された属性は、伝奇性の復活、もしくは再生といった言葉で処理できる程度のものではない。まさに集大成とよぶにふさわ

しい、先行物語の主人公の伝奇的超越性を吸収・網羅してなった、所謂、超人の典型であった。[12]

もとより、『狭衣物語』は、自らの物語世界が、歴史的現実的な世界とは全く切り離された別世界であることを明確に宣言していた。

勾欄にをしかゝり給へるまみ・気色・御声などは、かの「桜は避きて」とて花の下にやすらひ給へりし御様を、その折は見しかど、この御有様、又類なげにぞ、何事の折節も見ゆる。

（巻四・360頁）

かつて六条院に仕えた女房が、そのまま源氏宮に仕える女房となり、若菜上巻における往年の柏木と眼前の狭衣大将が比較されている。『源氏物語』と語り手を共有する『狭衣物語』の設定は、自身が『源氏物語』に連続する正統的作り物語であるという主張と同時に、一切の歴史的な現実性との葛藤から開放された純粋に虚構の世界でもあるとする自己規定なのではないだろうか。『狭衣物語』の登場人物達は己れの思念や行為を常に先行物語中の人物のそれと比定する。『狭衣物語』の前に存在した過去とは、『源氏物語』をはじめとする十九種類に及ぶ、様々な引用された物語の内容であった。[13] 時として、『狭衣物語』では、先行物語の内容は、あたかも『源氏物語』における推拠と同様の意味付けがなされているのである。

この意識的に人工化された物語世界内での狭衣大将は光源氏とは異なる次元での完璧性を期して成された人物造型であるといえよう。けだし天人の化身たる『有明の別れ』の女大将が、狭衣大将にその造型の範を仰いだことは、物語史の伝統的な流れに鑑みて、妥当かつ自然なものであるだろう。

(三)

ところで、狭衣大将の性格は、所謂、宇治十帖の薫型に分類されている。その内攻性や優柔不断、源氏宮一人への単線型愛情などもさることながら、彼をして、最も薫に近接せしめているのは、顕著な現世出離、道心志向であろう。こうした狭衣大将の内面に、前章までに扱った外側の伝奇性がどのように関与しているかを考察したい。

狭衣大将自身の内では、出家への最大の動機は源氏宮への叶わぬ恋であったが、意識の深層ではむしろ、自己の超越的資質こそが厭世出離へと彼を赴かしめた根本原因であったと考えられる。それが物語内で総括・明示されたのが、出家行を控えた三度目の奇瑞（琴による賀茂の神殿鳴動）を目にした狭衣大将の反応であった。

(A)かくのみ、はかなき事に触れて、おどろ〳〵しう、神・仏も、聞き驚かせ給気色なるを、「遂には、いかなるべき人にか」と、嬉しうめでたくは思されで、ゆゝしう忌々しう、「此世は仮初なるべき」と、度ごとに思されて、我心にも、心は浮き立ちて、いとしもなき、うち〳〵の御有様につけても、「心にかなはざりける、宿世の程、恨めしく、なぞや」とのみ、思されて、いさゝかこの世にとまる御心にはなきなめりかし。

（巻三・335頁）

ひるがって、最初の奇瑞、天稚御子降下事件がそもそも出離への第一歩を踏み出させたものなのである。それまでの狭衣大将には漠然と

した無常感はあったものの、あくまでも両親の過剰な危惧の反映にすぎなかった。

(B)をとなび給へるまゝには、（父母の懸念が）あまりくるしう、憂きは、頼まれぬべき心地のみして、思さるゝ折々もあるべし。（巻一・33頁）

しかし、天稚御子がこの世にあまる彼の美しさを惜しみ、天上へ誘うに及んで、両親の不安を自らのものと自覚するに至るのである。[14]

(C)何となく真に心も浮かれて、ありつる御子の御かたち・けはひ恋しく、口惜しう思え給へば、「げに、殿のの給ふやうに、この世には有り果つまじきにや」と心細きに（巻一・51頁）

一方で、天稚御子降下事件は女二宮降嫁をもたらす結果になり、狭衣大将に源氏宮への恋慕を固着させ、この直後に、彼は源氏宮に衝動的に恋を告白する。そして、予想通り拒絶されて、彼の現世離脱願望は本格化した。が、あやにくにも、源氏宮の拒絶はよけいに彼の未練をつのらせ「恋しさもつらさも同じほだしにて（巻三）」と、厭世的感情を抱きつつ、ずるずると出家行はひきのばされてゆくのであった。

天稚御子事件は、物語の始発部におかれ、愛執と道心のはざまに彼を追いやる契機となり、その後の展開を領導することになる。あたかも、宇治十帖において、薫が弁の告白によって宇治に決定的に繋ぎとめられ、[15]道心と響き合う特異な恋の物語がはじまったように。薫は柏木と女三宮との密通の子という宿世の自覚から、都の六条院的栄華に疎外感を抱えている。全く方向性は異なるものの、彼らは共に、周囲とは異質な自己を認識することによって彼岸を願うようになったのだ。

もともと冒頭から、六条院を思わせる堀河邸の晩春の景、兄と弟を帝にもつ光源氏の如き一世源氏の父関白、先帝の妹である内親王の母、異母姉は今上の中宮という環境であり、厚い帝寵・すぐれた世評・現世の欲望に淡白な厭世的性情など、何れをとっても薫と重なるような叙述がなされてきた。[16]薫のように不義の子という負の属性がとり除かれた代わりに、天稚御子降下によって、この世には余る神異の存在という属性が付与されて、狭衣大将は薫の後継者となることが完了する。狭衣大将は玉に瑕のない薫なのである。そして、薫が次第にその道心を日常性に埋没させていくのに対し、狭衣大将は再三繰返される奇瑞のたびに出離願望は(A)にみるようにより強化されていくのであった。人物像の単なる模倣ではなく、『狭衣物語』に、主題として薫の持つ精神性をより一層継承発展させようとした問題意識が存したことは跋文からもうかがうことができる。

「たゞ、男の心は薫大将、かばね尋ぬる三宮ばかりこそ、あはれにめやすき御心なめれ」と、からうじて、思ふ給へつれど、「男も女も、心深きことは、この物語にぞ侍る」とぞ（巻四・467頁）

より鋭くより深刻に、恋と道心の間をたゆたい苦悩する心のあり方が『狭衣物語』の主題の一つであったのだろう。[17]就中、中心人物である狭衣大将は、彼の持つ超自然的資質がそのきわめて内面的な憂悶と有機的に結びついており、彼の造型の中に、物語の伝統的要素たる伝奇性と『源氏物語』の開拓した精神性との止揚の試みを見出すことができるのである。

もっとも、狭衣大将の性情には非薫的な側面も多分に含まれている。

たとえば、薫の主たる性格の一つであった保護者的な配慮や篤実さは欠落しており、飛鳥井姫君の経済的不如意を知りつつそのまま放置したため、みすみす乳母の陰謀により、姫を失うことになる。また、結婚の意志がないにもかかわらず、女二宮と衝動的に契りを結んでしまったりするのも薫にはない一面であろう。

とりわけ、不可解であるのは、狭衣大将が自ら「まめ人」を標榜し、「思ひそめつること変らぬ心癖」と規定されているにもかかわらず、しばしば多情にして移り気という正反対の評価を女性達から下されていたことである。

（皇太后宮）

○「……大宮は、いみじう後めたげに聞えさせ給めり」と言へば、（母が）「あやしのあだ名や。きゝ違へさせ給へるにや。……」（狭衣）

（巻二・135頁）

（式部卿宮姫君の母）

○御心のまに〳〵、尋ねらるらんあまたの列にては、本意なしや。

（巻四・406頁）

（式部卿宮姫君の乳母）

○月草に聞いたてまつりし御心の後めたさなれど、思ひしよりも過ぎたる心地のみするに、人々のすぎにし方の物語などするを聞くにぞ、なをいとあやうくも頼もしくもありける。（巻四・410頁）

こうした評価は、むしろ「なほ音に聞く月草の色なる御心なりけり」（総角巻）いわれる匂宮に近い。そして前に述べた経済的配慮のなさや女性に対する衝動性も、どちらかというと匂宮の人物像に通じるのであって、[18] 狭衣大将には、本来の薫型造型の中に、相反する匂宮的要素の混入を指摘できる。その他にも、権門の姫君には近づかなかった薫と違って、巻一では宣耀殿女御や一条院姫宮との交情が語られ、巻二では中務宮姫君、巻四では致仕大納言の姫君への好奇心をみせるなど、狭衣大将の色好み性がしばしば強調されているのであった。

ここで注意されるのは、後期物語に特徴的な「まめ人薫型」主人公と「色好み匂宮型」副主人公の二項対立が『狭衣物語』には存在しないことである。宇治十帖以前でも、『宇津保物語』の仲忠と涼、『源氏物語』正編前半の光源氏と頭中将のように主人公にはほぼ同格のライバルがいるのが物語の常道であったようだ。ところが、『狭衣物語』には、狭衣大将以外に活躍する若い男性がいないのである。本来存在するべき対照的な他者を持たなかったことが、薫型狭衣大将に匂宮的要素が混在することと関わっているのではないだろうか。狭衣大将にある匂宮的なものは、彼のなかに色好み型副主人公を吸収してしまったことの痕跡であると考えると、そこからも相対化する他者の存在を許さない狭衣大将の物語内部における唯一絶対性を導くことができるだろう。[19]

彼の絶対性は、『源氏物語』、光源氏の準太上天皇に典拠を得た狭衣即位のいきさつに端的にあらわれている。本となった『源氏物語』と比較したとき、『狭衣物語』では女二宮腹の若宮が冷泉帝に相当するが、冷泉帝にくらべ若宮の存在は即位における必然性に乏しい。冷泉帝なくして光源氏が準太上天皇となることは考えられないが、狭衣大将の即位は天照神の神託によって決定するのである。

大将は、顔かたち、身の才よりはじめ、この世には過ぎて、たゞ人にてある、かたじけなき宿世・有様なめるを、おほやけの知り給はであれば、世は悪しきなり。若宮は、その御次々にて、行末をこそ。親をたゞ人にて、帝に居給はんことはあるまじきことなり。さては、おほやけの御ために、いと悪しかりなん。やがて一度に位を譲り給ては、御命も長くなり給なん。（巻四・425頁）

右の神託以前に、若宮は次の春宮候補に上っており、神託の中でもそれが狭衣即位の根拠になっているが、実はこのとき既に若宮は臣籍降下していた。

父帝だに、たゞ人になし聞えてし宮を、又とり返し、坊に据へ給て、位を去らせ給ことはあるまじきこと（巻四・425頁）

しかも、狭衣即位の後は、嵯峨院は若宮の出生に疑惑を持ち、藤壺（式部卿宮姫君）腹の一宮が誕生すると、若宮は立坊すら危ぶまれるようになる。用済みといわんばかりの扱いで、『源氏物語』における冷泉帝の存在の重さとはほど遠いものがある。極言すれば、若宮なしでも狭位即位は十分可能であったが、できる限り『源氏物語』と似せようとする方法の要請に従って、若宮を口実にしたにすぎない。『狭衣物語』の中では、狭衣大将の理想性を強調することこそ最大目的であり、他はそのための手段にすぎないという物語の論理を、若宮の処遇は示している。[20]

ところが、これほどまでに物語内で絶対的地位を与えられた狭衣大将が、しばしば周囲からその行為や性格を手厳しく批判されているのは興味深い。母を死に追いやられ、自分も出家した女二宮が狭衣大将を深く怨むのは無理ないにしても、彼の同情者である中納言典侍の言も辛辣である。

○いでや、いとけしからぬ心憂き御心づから、誰が御為にも、いと惜しうも侍るにこそ。…（中略）…いでや、まめやかに心憂き御心ばへにて。（巻二・162頁）

○（女二宮のつれなさを嘆く狭衣大将に対して）

「例の心癖ぞかし」と、生憎く思えけり（巻三・268頁）

最初の妻一品宮から養女の姫君の扱いについて

○あながちに、隠すべき事かは。さるまじき事をさへも隔つる、心の程かな。まいていかに（巻三・287頁）

と言われるばかりでなく、最愛の式部卿宮姫君からさえも

○ならひにける忍び難さの、物嘆かしげなる程は、をのづから漏りつゝ、「馴はば」とのみ、思聞えさせ給へるかひなう、姫君にも「うち解けにくゝ、隔て多かりぬべき御心」と人知れず見知られ給けり。（巻四・419頁）

と、醒めた眼でながめられ距離をおかれている。

もちろん、物語内には、いたるところに狭衣賛美が散見するのは言うまでもない。だが、ごく身近な女達からの批判は痛烈であった。光源氏はもとより、匂宮という強力なライバルに屢々痛手をこうむった薫がつねに賞賛のまとであったのに対し、外面的には絶対である狭衣大将は、その内面を作中人物の眼からはかなり相対化されているのである。

こうした外面と内面の落差の意味するところは一体何なのであろうか。

一つには、彼の精神的主題をより追及させるためであろう。引用(A)にみるように、外面の超越性への自覚が恋の不如意をより深く痛感させ厭世感をつのらせるのみならず、彼にかかわる女達の批判の眼は彼を疎外し、孤立させ、更なる苦悩と悔恨へ追いやることになる。外面の輝かしさが内側の憂愁を深化させかつ際立たせる。

けれども、それ以上に狭衣大将という存在の絶対化は、彼の内面の相対化を不可避的にもたらすものではないだろうか。

薫の性格や行為の意味は、対照的な匂宮のそれから逆照射され物語の中で正確に定位されるであろう。したがって、わざわざ作中人物に薫を批判させる必要はない。しかし、狭衣大将は絶対至上の存在であるために、彼以外に行動し物語を展開してゆく男性人物、つまり、存在によって彼を相対化する男性人物をもたなかった。それゆえに、物語を唯一動かした自分の行為を対象化し、意義づけるのは「過ぎぬる方悔しき御癖」という彼自身の反省癖[21]とそれにかかわった女性達の批判しかなかったと考えられるのである。

ただし、このような方法は彼の精神の姿を著しく弱体化させることにつながるのは否定できない。薫の精神的課題を継承した狭衣大将には、もはや光源氏の果断な行動力は与えられず、それを補うべき匂宮の存在もない。

一般的にいって、右のごとき人物では、長編の物語世界を最後まで領導してゆくのはきわめて難しいのではないか[22]。巻二・巻三の末で狭衣大将が出家して物語が終結しそうになるのはそのためもあろう。そこで、他に行動する者がいない以上、物語の途絶や停滞を打破するには、夢告や神託など外部の冥界の力を介入させるしかなかったのである。

かくして、『狭衣物語』の伝奇性は必然であった。

狭衣大将は伝奇性と彼岸を志向する精神性という、後期物語の二本柱を統合すべく創造された完璧な登場人物であったが、外形と内実の差を余儀なくされ、一人の人間としてはややもすれば分裂した印象を与えるようである。そのせいか『無名草子』でも、一品宮や女二宮、飛鳥井姫などには同情と共感に満ちた人物評が加えられているのに対して、狭衣大将には一言もふれられていない。また、『有明の別れ』の女大将を除いては、以後の物語の主人公の造型に決定的影響を与えたとはいい難いものがある。

とはいえ、狭衣大将はその外形に作り物語の伝統的超越性の完成形態を示すとともに、一人の卓越した主人公の行き詰まりと、その結果としての抜きん出た存在をもたない平凡な貴族社会の恋愛しか描けなかった長編擬古物語への途を暗示した点で画期的であった。平安朝物語から鎌倉擬古物語への、過渡期極初の混沌を『源氏物語』の枠組みで整理しようとした『狭衣物語』の達成と限界は、狭衣大将という人物造型に如実に体現されているのである。

注

(1)古典文庫『有明の別れ』上、中村忠行氏の解題。
大槻修氏『在明の別の研究』研究編。

(2)対訳古典新書『有明けの別れ』。
日本古典文学大系『狭衣物語』。
なお、本稿における『狭衣物語』の考察は、三谷栄一氏によれば最も古形を保つといわれる一類本系の本文を対象とする。

(3)『有明の別れ』は引用(3)の後に、

げにさばかりすぐれたらんとは、たれかこと人のたぐはむ。たゞもろともにおきふして、二人ながら天人にむかはれたまふべきぞ。

と、女大将と妹の姫君が二人とも独身のまま、昇天するのではないかという女房の陰口が続いている。この部分も、実は『狭衣物語』巻二の、入内をひかえた源氏宮と共にそのまま天にのぼってしまいたいと願う狭衣大将と関係があるのではないか。

霧りふたがり月もさやかならぬに、いとゞ物あはれにて、天降り給へりしみこの御有様、思ひ出られ給。「なぞや、かく世にとゞまりけん」と悔しきに、「麓よりだにこそなを帰りけれ。本意のまゝに、みたてまつらざらん前に、やがて」と、おもへば、御簾を引き上げて、長押に押し掛りて、「御琴は、ひかせ給より、等しうだにきこえぬを。参らせん」とて、せちにそそのかして、我は琵琶を取り寄せて　(192頁)

天稚御子降下の再現を期して、源氏宮には琴をすすめ、自分は琵琶を弾いて奇瑞をおこそうとするのである。

(4)益田勝実氏「物語の成長期」(日本文学研究資料叢書『平安朝物語Ⅱ』所収)、高橋亨氏「可能態の物語の構造」(『源氏物語の対位法』所収)に、こうした伝統的な物語の発想の型が論じられている。また、『源氏物語』でも紅梅大納言家の若君の誕生をめぐって、父母が神仏に祈念したことが語られている。

御子は故北の方の御腹に、二人(姫君)のみぞおはしければ、さうざうしとて、神仏に祈りて、今の御腹にぞ、男君一人まうけたまへる(新潮古典集成本・紅梅巻)

(5)松尾聰氏『平安時代物語の研究』の「有明の別れの物語」、常盤博子氏「『在明の別』と「天人降下」考」(『実践国文学』42号)参照。

(6)注(1)参照。

(7)日本古典文学大系『竹取物語　伊勢物語　大和物語』

(8)『風葉和歌集』
巻七神祇

左大将かたちをかくしてところ〳〵見あるきけるころ前斎宮に大弐まさかぬかちかつきよりけるを大神宮と思はせてさま〳〵申けるにおそれておこたり申て出にけれはよみ給ける　かくれみのゝさきの斎宮

我為にあまてる神のなかりせはうくてそやみに猶まとはまし

同・釈教

ところ〳〵見ありき侍けるころほうしの女のてをとらへて侍けるに仏の給ふやうにてみゝにいひいれ侍ける　かくれみのゝ左大将

たもたすてあやまつとかをみる時そをしへし法もくやしかりける

『増訂　校本風葉和歌集』

なお、ここに引用した『風葉和歌集』の二首と、注(7)の『竹取物語』の記事は、稲賀敬二氏「隠身と変形序説」(『平安後期・物語と歴史物語』所収)に指摘され、その関連が論ぜられている。

(9)『鎌倉時代物語集成』第五巻所収。

(10)　そこには、蓬莱の仙宮の中に、世ゝにむすべる契ふかくて、この世のいのちもまた、ひさしかるべきゆへあれば、いまは天衆にかへりがたくや。『琴のこゑにかかづらひて、下界にとまるべきゆへあり』とこそ、かたえの人もいふなりしか。　(巻三・219頁)

この華陽公主が臨終にあたり琴を弾くと「いなづましきりにして雲のたゝず

まひたゞならねば」と天が奇瑞の様相をみせる。

(11)角川文庫『宇津保物語』上巻。

(12)深沢徹氏「往還の構図もしくは『狭衣物語』の論理構造――陰画（ネガ）としての『無名草子』論――」（『文芸と批評』第5巻3・4号）や井上真弓氏「『狭衣物語』の構造私論――狭衣の果たした役割より――」（『日本文学』32巻1号）は『狭衣物語』内部の構造分析から、同じく狭衣大将が超越的天上性を有する存在とされている。

(13)たとえば巻四、狭衣帝の平野行幸は

この度は、紅葉の飾りにて、柞原おかしう分け入らせ給にも、山もみな紅なるを見渡せ給にも忍びても御覧ぜぬ所々は少なかりしかば、北山のわたり、法音寺とかや、「袖濡らす」宰相の通ひ給ひし所などは、おかしかりしこと、思し召し出でらるゝに　（445頁）

散逸物語『袖濡らす』の宰相の事跡を歴史的過去としたうえで、それを回想して重ね合わせられるように叙述されている。

(14)森下純昭氏「狭衣物語の人物関係――『らうたし・らうたげ』をめぐって――」（『岐阜大学国語国文学』第13号）は、狭衣大将の不安を「存在の不安」と呼び、源氏宮への告白も、この「存在の不安」をまぎらわせ、恋情によって自己を現実に繋ぎとめようとする自己保存の願望に基くものと説かれている。

(15)弁の告白も、薫にとっては「あやしく、夢語り、巫女やうのものの、問はずがたりすらむやうにめづらかにおぼさるれど」（橋姫巻）と非現実的・神秘的印象を与えるものであった。

(16)後藤康文氏「もうひとりの薫――『狭衣物語』試論――」（『語文研究』68号）は観点は本稿とは別のところにあるが、『狭衣物語』を『源氏物語』正編に連続するものとし、狭衣大将を薫の位置にとってかわる者とする作者の意図を論ぜられている。

(17)散逸物語『かばね尋ぬる宮』も入水した女を慕って出家する三宮を主人公とした恋と道心の物語と推定されている。また『狭衣物語』中の「心深し・心深げなり」の用例は10例。女二宮1例・飛鳥井姫君2例・嵯峨院1例・狭衣大将5例で、狭衣大将を除くと皆出家した人物である。文脈に応じて「思慮深い」「情愛が深い」など様々に現代語訳されるが根本は心のひだが多く、隅々まで繊細鋭敏に神経が行き届くため、時に物事をいいかげんに考えられず深刻になりがちな心のさまを意味する。『源氏物語』で「さま殊に心深く」と賞された六条御息所が同時に「うらむべきふしをげに長く思ひつめて深く怨ぜられし」とも評されるのが参考になる。

(18)二条院に迎えた宇治の中君に対し、匂宮は

限りもなく、人にのみかしづかれてならはせ給れば、世の中うちあはずさびしきこと、いかなるものとも知り給はぬ、ことはりなり（宿木巻）

と、高貴な育ち特有の鈍感さを発揮する。中君にくまなく行き届いた経済的援助の手をさしのべたのは薫であった。浮舟への匂宮の衝動的振舞は言うまでもない。

また、『無名草子』で激賞される男性は薫と『みつの浜松』の主人公中納言である。二人の共通点は、女性に無理強いしない「心のどかさ」と保護者的な誠実さであろう。こうした点をもたない狭衣大将は少なくとも『無名草子』においては、薫的ではない。

(19)鈴木一雄氏は、全ての事件が狭衣大将の心と眼を通じてのみ語られる『狭衣物語』の基本構造から主人公としての絶対性を指摘された。新潮古典集成『狭衣物語・下』解説参照。

(20)『無名草子』の狭衣即位への批判

何事よりも何事よりも、大将の帝になられたること。返す返す見苦しく浅ましきことなり。

は、このような強引さにむけられているのであろう。

(21)巻二で女二宮の出家を耳にして、

たゞ、あながちに現なき心の癖にて、「かならず、あるべき事」と思さるゝを、せちに心のどかに思聞えさせ給へる程に、あまたの人をいたづらになし聞えさせ給へるは、人にこその給はねども、一方ならず、いかでか、世の常に思し嘆かざらん。　（167頁）

地の文ではあるが、狭衣大将の自責の念とうけとってよく、以後もくり返し

述べられている。

(22) 片岡利博氏「『狭衣物語』構造論――巻二女二宮物語について――」(『語文』48) は、巻一の飛鳥井女君物語や巻二の女二宮物語を、ストーリーを推進し物語を構築してゆくのは女性達の意志や行動であって、狭衣大将は主体的に関わっておらず、物語の「主人公」の座から降りてしまい実質的には「女の物語」になっていると結論づけられた。既に永井和子氏「寝覚物語の主人公――その理想性をめぐって――」(『学習院女子短期大学国語国文論集』7) が早くに、『夜の寝覚』において、主題性が男の主人公から寝覚上という女主人公に完全に移転してしまい、その理想性を否定されてついに「主人公」ではなくなってしまう現象を指摘され、後期物語の「男性主人公」の凋落傾向を論ぜられている。作り物語の主人公の決定版ともいうべき狭衣大将をもってしても、この潮流には抗しがたかったのであろう。

(一九九三年八月十一日　受理)

(あだち　けいこ　女子短期大学部講師)